

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2019年7月1日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第30号

東九条の新しい波

東九条春まつりも8回目を迎えました。前任の矢吹文敏さんより実行委員長の職を引き継いで2年目となる今年は、昨年よりも余裕を持って全体を眺めることが出来ました。そして展示も出店もステージもますます拡大・進化をしていると実感しました。準備をされたスタッフの皆さんに頭が下がる思いです。また、トークショー<わたしと東九条>に興味をもって拝聴しました。若い方々が自分と東九条との関わり、問題意識を語る姿を見て、今、東九条には新しい波が押し寄せているのではないかと感じました。

思い返せば私と東九条との関わりは、今回のトークショーに登壇された皆さんと同年代であった1980年代に遡ります。それまで反入管闘争や金大中氏救出運動、京都韓国学園建設促進運動、就職差別反対闘争等で多くの在日コリアン（あえてこの言葉を使いますが）の若者たちに出会い、様々な学習を積み重ねてきたつもりでいました。しかし大韓教会南部教会で開校した「オモニハッキョ」に参加し、必死に文字を覚えようとされているオモニたちに接する事で、自分がいかに差別の現実に無知だったのかを痛感させられました。当時の在日コリアンは、健康保険・年金制度から排除され、公的住宅にも入居できず、就職もままならないという差別・排外の状態に置かれていました。こんな現状は絶対に許されない、という怒りが東九条に私を関わらせた原点といえますし、当時の多くの若者が共有した問題意識だったと思います。

現在の東九条は少子高齢化の波に洗われ人口が減少しています。そして市街地住環境整備事業の進捗により膨大な空き地が生み出されています。その一方で芸術・若者をキーワードとした新しいまちづくりも開始されています。私が東九条に関わりだした1980年代には想像も出来なかったような、多様で多文化な生き方、問題意識が波のように東九条に押し寄せ、新しい息吹が生まれているのではないかと感じています。

かつて多くの若者がここ東九条に引き寄せられてきたように、いま新しい感覚を持った若者たちが登場してきています。そして差別・貧困に抗した活動の歴史は、新しい課題として新しい層に引き継がれようとしているのではないかと感じています。また東九条春まつりが、今後とも地域の歴史の継承・世代の継承に貢献できればと考えています。

（小林栄一 東九条春まつり実行委員長）



第8回東九条春まつりトークショー〈わたしと東九条〉

「もっともっともっと多様な東九条の若者たちの思いがあるはずです。このまちの人間模様を描いていくトークショーは、きっとまだまだつづくでしょう。」—2年前、第6回東九条春まつりのトークショー〈青年の部〉の内容をネットワークサロン通信23号に掲載した時に、その時もトークショーの進行をしてくださった、さとう大さん（エルファ）の一文です。第8回東九条春まつりでは、「わたしと東九条」というテーマで、まさに多様な若者のトークが繰り広げられました。東九条で育った人、芸術を通じて出会った人、働く人などなど…それぞれに多様な思いを持ちながら東九条に関わる青年たちが、このようにつながり交わることが、東九条の魅力ではないかと思います。そのことをトークの中身から感じていただけるとうれしいです。

〈トークショー登壇者〉

□芥川 実穂子（あくたがわ みほこ）

東九条にできた小劇場 THEATRE E9 KYOTO を運営する、アーツシード京都事務局スタッフ。

□浦 宏年（うら ひろとし）

東九条の北側に隣接する地域、崇仁生まれ。東九条マダンなど地域のまつりに参加。

□呉 永伍（お よんお）

大阪生まれ。東九条にあるエルファ共同作業所職員。

□朴 哲（ぱく ちよる）

ハンマダン所属。東九条マダンの和太鼓サムルノリに、演出・奏者として参加。

□浜辺 ふう（はまべ ふう）

東九条生まれ。ソロユニット〈九条劇〉を設立し、演劇活動をしている。

□山口 恵子（やまぐち けいこ）

演劇グループ〈BRDG〉メンバー。2017年より東九条の活動に参加。

〈コーディネーター〉

□さとう 大（さとう だい）

エルファ共同作業所職員。2017年に続きトークショーの進行役。



さとう 今年の春まつりトークショーの題名は「わたしと東九条」です。この地域に関わる若い世代の6人に話してもらいます。1つ目のテーマは「東九条との出会い」です。東九条に来たきっかけをお話してください。

芥川 初めて来たのは2年前の春まつりの準備でした。周りの皆さんが手馴れた作業をされているなか、この地域に劇場をつくりたいという話をしました。子どもたちとのワークショップをする機会をいただき、人の温かさを感じました。劇場ができるということで、期待の声を寄せていただきました。5月半ばに工事が終わる予定なので、これからあらためて東九条の一員として関係性を築きたいと思えます。

呉 4年前に職場が東九条ということで来ました。自分は大阪出身の在日コリアンですが、東九条のことは知らず、京都は観光地に来た程度でした。いまも仕事として関わっているくらいなのですが、おもしろい地域だと感じています。

山口 2012年から、インタビューをしながら作品をつくっています。海外からの移住者への取材を通して、日本とは日本人とは何だろう？ということに疑問がわいてテーマにしてみました。4年前、偶然チラシを見て東九条春まつりに来て、多様な人が集まって踊っているのを見て、私が目指している場所がここにあると気付きました。ここに関わりたいと思い、自分からスタッフをやらせてくださいと話して、司会までさせていただきました。月1回、フィリピンルーツの子どもたちの学習支援もしています（たけのこ会）。この地域ではあちこちで芸術が行われていて、私が理想とする多文化と芸術のつながりを感じます。ここが大好きで出入りさせてもらっています。

浦 ぼくは崇仁の出身なんですけど、東九条と崇仁には壁があると言われていましたが、小さいときから友だち同士ではそんなこと意識せずにつきあっていました。崇仁小学校にいるときも、山王小学校のほうが近いやんと思いつながり生きてきました。九条なのか七条なのかというのは、いまだにけっこう聞かれるんですけど、どっちでもええやんと思っています。東九条と出会ったというより、出会ってしまっていたと思います。きっかけもわからへんし、ずっと一緒やんと思っている感じです。



第26回の東九条マダンのマダン劇に、
デイサービス職員役で出演する浦さん。
<写真提供：東九条マダン実行委員会>

さとう 続いて、東九条で育ってきた、活動してきた2人の話を聞かせてください。

哲 33年前に結成されたハンマダンに関わったのが東九条に来たきっかけです。80年に韓国の光州で民衆が軍事政権に反抗して運動をおこして多くの被害者が出ました。日本でも韓国の軍事政権に抗議しようという人たちが集まって、韓国の民衆文化運動として展開されていたマダン劇を京都でやろうという話になりました。若者たち、大学生や社会人が集まり、そのなかには在日も日本人もいて、ハンマダンを結成しました。ハンマダンとは一つの広場という意味で、みんなが集まることができる場をつくりました。これが後の東九条マダン結成の中心になりました。そこにぼくが行きはじめたのは中学生のときです。伏見の向島で育ったのですが、ノリモニ（おばあさん）が住んでいた東九条にはときどき来ていました。ハンマダンができてからは週1回通い出しました。30年前から東九条に住んでいるので、いまでは東九条のほうがホームです。向島の小学校はマンモス校だったのですが、本名で通っていたのは、ぼくら3人兄妹だけだったんです。しょっちゅうストレスがあつてケンカしていました。東九条に来たらまわりの人から自然に、「チョリ、チョリ」と呼ばれて、自分の中のとがっていた部分がかわって、自分を出せる心地よさを感じました。それから住みだすようになりました。

ふう 私は陶化小学校出身で、地元の間人です。東九条マダンが始まった1993年は私の生まれた年です。日本人も在日もいろいろな民族の人たちが垣根をとりはらってまつりの日を楽しもうという環境が当たり前でした。希望の家カトリック保育園では「おはようございます。アンニョンハセヨ。」と挨拶して、歌うときには1番を日本語で、2番を朝鮮韓国語で歌いました。日本の遊びと朝鮮の遊びが混在していました。小学校に入るとき、民族名だった幼馴染が通名に変わったんです。なぜ名前が2つあるのか自分の母親に聞いて初めて、在日コリアンのこと、本名では生きづらい環境があることを知りました。6歳の私は「私には韓国の名前は無いの？」と母親に聞き、「あんたは日本人だからな

い。」と言われました。陶化小学校では3年生になると朝鮮半島にルーツをもつ子どもたちが希望制で民族学級に行くようになります。文化祭でサムルノリを発表していたので、私も3年になったら民族学級に行ってチャンゴを叩こうと思っていたのに、ルーツのある人は行けるけれど日本人は行けないよと言われて先生とケンカになったんです。先生は「あなたは日本人でしょ。なんで行きたいの?」と言うけれど、私がその文化に愛着を持ち自分のものとしていた背景を想像してもらえず、辛い思いをしました。自分が育った環境には2つの文化が混ざっていて、そこに境界線が引かれて、私は線の「こっち側」の人間だと言われた感じがしました。そのあたりから、なぜ朝鮮人が日本に住むようになったのか、なぜ東九条の地域が多文化共生の取り組みをしてきたのか疑問をもつようになり、植民地支配の歴史や東アジアの歴史を学びました。大学を卒業して、今は演劇活動をしています。

さとう

東九条の人づきあいは在日コリアンが自然体でいられるものであり、初めて訪れた日本人をも懐広く受け止めてくれる居心地のよい関係なのだと思います。一方で、民族や出身による差別から自分たちの文化や権利を守るために団結することで、制度上の境界をつくってきたという側面もあります。そこで育った若い世代から、境界線を引かれることに違和感を持ったという意見も出されました。民族学校で高校まで学び、大学で日本社会の中へ出ていった経験をもつ呉さんの話も聞かせてください。

呉

大阪にある民族学校、建国学校を小中高と出ました。在日コリアンがたくさん通っていて、両親の都合で一時的に日本に来た人や、女子バレー部が強かったのでそこに入部するために入学した日本人の生徒もいました。建国学校の環境は居心地よかったです。高校進学で日本の公立私立学校に行くのか、建国に留まるのか悩む人が多かったのですが、ぼくは外に出るのは不安があり建国高校に進学しました。大学進学では外の世界に出ないといけなかったので、一浪しているときに河合塾で初めて日本人ばかりの環境に置かれました。けれど自分が不安に思っていたほど違和感がなく、同世代の人たちと関係作りができたと思います。大学でも本名を名乗ったのですが、周りは受け入れてくれて、在日の存在を初めて意識したことも率直に話してくれて、すんなり馴染めたと思っています。



ふうさんの「九条劇」に山口さんが参加。九条湯というノスタルジックな会場で「エコー」が上演された。二人の顔が合わさったポスターは、東九条で話題に。<写真提供：九条劇>

さとう 浦さんから、崇仁と東九条の境界について感じていることをお話しください。

浦 崇仁は同和地区なんですけど、勉強が出来ない皆が集まる同和施策の勉強会があって、ぼくはそこで勉強させられてました。同じように勉強が出来なくて遊んでたやつがいたんですけど、そいつは崇仁の人間じゃないから勉強会に出たくても出られなかったのです。

なんでぼくだけ勉強しなきゃあかんの？っていう疑問がありました。そこからぼくも同和施策って何なのかを勉強して、考えました。あの時、先生が友だちに「じゃあ一緒に勉強しようか。ちょっと入り」って言ってくれたらよかったんじゃないか、ぼくだったら手をつないであげられる関係をつくってあげたいと思います。

さとう マイノリティーの生活や人権を守る施策が実現していく傍ら、そのすぐ近くで混ざりあいながら生活していた人たちが切り離されていく感覚が語られました。日本社会のマジョリティーである「日本人」としてこれをどのように聞かれましたか。

山口 チョリさんのいう心地よさは、私が春まつりに感じた心地よさとも似ていると感じました。私は自分がマジョリティーに置かれていることの心地悪さというか、格好悪さを感じるがあります。春まつりが私に感じさせてくれた心地よさは、いろいろと複雑な経緯の上に生まれたものだと思うので、私が感じているよりもっと奥深いものだろうとも思っています。

芥川 私が感じたあったかさ、チョリさんのいう心地よさ、ふうさんの感じた違和感、それぞれの想いを話せる場があるということや、その想いに気づくことができる環境があることが素敵だなと思います。そんな想いをエネルギーに、ぜひ作品にさせていただき、劇場で上演していただきたいです。そして多くの人に観てもらい、知って欲しいです。

さとう 東九条マダンのコンセプトの一つは誰もが主体になれるというものですが、取り組みを通じてマイノリティーに対する差別は解消されてきたのか、どのような絆がつくられているのか、感じていることを聞かせてください。

哲 東九条マダンがはじまる前から歴史はあって、希望の家の秋のバザーで農楽隊がブームルをしていました。東九条マダンは練習場所を探すのに苦労して、公園でやって怒られたこともありました。やり続けることで認知度が高まったと思います。鴨川で個人練習をしていたら石を投げられたり、「うるさい、勝手に使うな」と貼り紙されたこともありますが、その人たちの心を動かせれば



エルファ共同作業所でご利用者さんに誕生日を祝ってもらう呉さん。

<写真提供：エルファ共同作業所>

状況は変えられると信じて続けてきました。がらつと変わるものではなくて、徐々に変わっていくものでした。東九条で出会う人たちは、世代も立場もまったく違うにもかかわらず、いろいろなことを話せて、自分の価値観や考え方も変わりました。これも財産だと思います。



元崇仁小学校で開催された、第26回東九条マダン。和太鼓サムレノリ（ワダサム）の1シーン。左が哲さん。〈写真提供：東九条マダン実行委員会〉

ふう

東九条マダンが石を投げられ受け入れてもらえなかった激動の時代を乗り越えた後の、キラキラフワ

フワしたユートピア時代を私は生きてきました。東九条マダンは年1回ですが、そこで育てられたと言えるほどの重みがあります。成長の喜びを感じられたし、世代の違う人たちと対等な気持ちでいろんな話ことができました。これが「地元」なのだと思いましたが、大学で話すと変わった地元だと言われ、特別な環境だったのだと知りました。激動の時代のことや、今、東九条に根付いているものを表現していきたいです。

さとう

昨年は東九条マダンが崇仁で開催され、主催者が差別を乗り越えていくための新しい仕掛けを作って動いていきました。この取り組みが差別を許さないまちづくりにつながって欲しいと思います。もうひとつのテーマは「芸術とは何か？」です。アーティストと観客との関係性、劇場の果たす役割といったこともお話しください。

山口

芸術は生活からは距離があるという反応が一般的なのですが、東九条で同じ感覚が持たれているとしたら驚いてしまいます。というのも、わたしが最初に東九条に来たときに「ここには芸術がある」というセンサーが働いたからです。舞台活動をやっている者として頭が上らなかつた。昨年の東九条マダンでは、涙が流れるほど感動しました。この地域の人がこれを何と呼ぶのかわかりませんが、わたしは「芸術」と呼びたいです。ふうさんが民族学級の話をして、哲さんが楽器で人の心を変えていきたいと話をされました。これは、自分自身のルーツやアイデンティティの表現に関することだと思います。私がこれまで演じてきた芸術とは違うのですが、大きな魅力を感じています。

芥川

東九条に小劇場をオープンできるのは、ここに多文化共生の取り組みがあるのを知っていたからではなく、本当に偶然の出来事で、幸運でした。わたしは事務員で、アーティストではないのですが、みなさんにぜひ劇場に来ていただきたいです。俳優は舞台上で観客のエネルギーを吸収して演じられます。観客も俳優のエネルギーを吸収して感じ取ります。同じ芝居でも見る日によって感じ方が違うこともあります。東九条に小劇場ができてよかったといってもらえるよう努力したいと思

います。

さとう 最後に一言ずつお願いします。

呉 人が抱える生きづらさは環境から来ていると言われますが、国籍もそのひとつだと思います。そういう生きづらさを少しでも減らすお手伝い如果能したらと思います。

山口 4月に入管法が変わって、さらに多くの人々が日本で暮らす状況ができているとニュースで見ました。東九条という地域がもつ歴史とか知恵とか環境とか土壌とか懐の深さとかが生きてくると思うので、そういうところに私も学んでいきたいです。

浦 ぼくの話が少しでも聞いていただけてありがとうございます。思いを言葉に。思いを行動にしていきたいです。

ふう 自分が小さいころから思ってきたことを伝えたいから、就職するのではなくバイトしながら演劇を続けています。これからもよろしくをお願いします。

芥川 シアターE9の年間パスポートがあります。山王、崇仁、陶化、東和学区にお住まい、もしくは仕事をされている人には、気軽に観劇していただきたいので、3万円のところを初年度限定1万円で販売しています。ぜひ劇場に来てください。

哲 東九条には新たな出会いがたくさんあります。その出会いのなかで、世の中にある壁を少しでもつぶせるような作品をつくり、表現をしていきたいと思っています。



6月、東九条にOPENした小劇場「THEATRE E9 KYOTO」。ふうさんや、山口さんの作品も上演が予定されている。
 <写真提供：アーツシード京都>



□ 所在地：〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町31（京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内）

□ TEL：075-671-0108 □ FAX：075-691-7471 □ E-Mail：info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間：9時～17時 □ WEB サイト：http://www.kyotonetworksalon.jp

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩15分

京都市バス 202・207・208 系統 九条河原町より徒歩10分／84 系統 河原町東寺道より徒歩1分